九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

清代における朝貢使節の相互交流と情報収集 : 朝鮮燕行使を中心としてみた

沈, 玉慧

https://hdl.handle.net/2324/1398290

出版情報：九州大学, 2013, 博士（文学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（2,3）

博士論文題目：

清代における朝貢使節の相互交流と情報収集
――朝鮮燕行使を中心としてみた――

沈　玉慧

要　旨

前近代における東アジア国際秩序を論じる場合、中華王朝を中心とした朝貢体制について検討することが不可欠である。ただし従来の諸研究では、主として宗主国たる清朝と朝貢国との放射的な縦方向の関係性が注目され、朝貢国同士の横方向の関係性に着目した論考は乏しい。特に清代には、東・東南アジア諸国が相互に使節を直接派遣して、公的通交を行うことは稀であったため、北京への朝貢は諸国が相互に交流を行ううえでも貴重な機会であった。それは明清時代の東アジアにおける、ヒト・モノ・情報の移動、海外情報の伝播などに対して、重要な役割を果たしていた。また宗主国である清朝が、このような朝貢使節同士の交流に対し、いかなる対応を行っていたのかという問題も、先行研究では十分に論じられていない。

本論文では、このような問題意識に基づき、朝鮮王朝の朝貢使節や随員が、その見聞を記録した『燕行録』を主要な史料として、朝貢使節同士の交流の実態を検討する。近年では韓国・日本・中国の学界において、『燕行録』の収集・整理と研究が急速に進展し、多くのテキストが影印・刊行されている。本論文ではこれらの『燕行録』をできるだけ網羅的に調査し、検討することにより、朝鮮使節による諸朝貢国との交流や情報収集の全体像を提示したい。

まず第一章では、すべての朝貢国のなかでも、北京における遭遇頻度がもっとも高かった朝鮮･琉球両国の使節が相互に邂逅し、交流した機会や状況について分析を加えた。両国の使節は、朝貢儀礼の場で接触し、筆談などによりコミュニケーションをとることが多かったが、そのほかに相互の宿舎を訪問して交流を行う場合もあった。その一方、清朝政府は朝貢使節同士が不必要に接触することには抑制的であり、北京に赴く人数を制限し、その宿舎を厳重に管理するなど、朝貢使節同士の直接的な交流を規制することも稀ではなかった。

第二章では、清代北京における朝鮮・琉球使節の交流の具体的な様態や相互認識について、より具体的な検討を試みた。朝鮮使節は、琉球使節の冠服・言動・印象などについて、かなり詳細な記録を残している。周知のように、明清交替以降、朝鮮国内では自国を中華文明の正統な継承者とみなす「小中華」意識が強まり、そのこともあって、総じて東南アジアの朝貢使節を「南蛮」とみなす傾向があった。一方、琉球使節に対しては、相対的に中華的な文化や礼制を受容した「海外禮義の邦」としてのイメージを有していたようであ

る。また琉球使節は朝鮮使節に、日本産（特に薩摩産）の物品を、琉球や土噶喇（トカラ）列島の産品などと称して贈ることもあったが、このことは、清朝はもとより、他の朝貢国に対しても、薩摩と清朝への両属関係を隠蔽する必要があったこと示すものと考えられる。

第三章では、朝鮮使節による、琉球使節との会談を通じた琉球情報の収集について包括的に検討し、朝鮮使節が琉球に対し、いかなる知的関心を抱き、その背後にはどのような時代的背景が存在したのかを考察している。清代を通じて、朝鮮王朝が北京に派遣した朝貢使節（正使・副使）や記録官（書状官）は、北京において清朝や朝貢国の情報を収集する任務も帯びていた。彼らは朝貢の機会を最大限に利用し、礼部や序班から朝貢に関する情報を収集とともに、朝貢儀礼の場での会談や、相互の宿舎の訪問などを通じて、琉球王国の朝貢使節から、琉球の歴史・国内諸制度・風習・漂流民送還などについての諸情報を得ている。

特に乾隆年間以後は、両国使節が朝貢儀礼の場で交流する機会が増加するとともに、朝鮮では実学派の知識人を中心に海外情報に対する関心が高まったこともあって、朝鮮使節や随員が記録した琉球情報にも、全般的により具体的で詳細な記録が増えている。一方、清代において朝鮮王朝と琉球王国には公式な外交関係がなく、また清朝は「人臣に外交無し」という理念のもとで、両国の使節・随員の接触に対してしばしば制約を加えていた。そのため、両国の使節が互いの宿舎に赴いて交流する事例は限られており、また両国の使節・随員が問答を交わす際には、常に通事が仲介し、使節同士が直接交流するのを回避する傾向もあった。

さらに第四章では、朝鮮使節と東南アジア諸国の朝貢使節との交流や情報収集の様態に検討を加えた。朝鮮と東南アジア諸国の使節は、口頭で意思を疎通することはできず、よって、もっぱら重訳や漢文を解する使者を通じて、問答を交わしたが、そのような機会も限られていた。そのため朝鮮使節が記録した情報は、おおむねその外見の描写にとどまっている。また、朝鮮使節は北京滞在中に、『欽定礼部則例』・『大明一統志』などの典籍や、京報や塘報などの刊行物からも、より詳しい東南アジア諸国の情報を入手することを試みている。一方、清朝は朝貢秩序を維持するため、朝貢国に機密情報が流れないように管理していたが、朝鮮使節は清朝と安定した朝貢関係を維持するためにも、清朝の諸朝貢国に対する待遇・有事の際の対応などの情報を、自国の対清外交の参考とするために収集・記録していたのである。

最後に第五章では、乾隆二五年～二六（一七六〇～六一）年における、朝鮮使節と安南・南掌使節、及び琉球官生との交流の実態を分析した。朝鮮王朝は鎖国政策をとっていたため、朝貢の機会を利用して海外情報の収集をはかり、他方で琉球は一貫して日琉関係の隠蔽に努めるなど、各国の朝貢使節は、他国の使節との交流に際し、自国の国益に従って行動していた。また朝鮮・安南両国がそれぞれ特有の自尊意識を抱いていたため、その両国使節の交流には友好的な一面だけではなく、自尊意識の競合も窺われる。その一方、清朝は必要に応じて諸国の使節の行動を管理し、相互交流に干渉するなど、朝貢秩序を維持す

るための措置を講じることがあった。

以上、本論文では朝貢使節・随員が著した朝貢見聞録である『燕行録』を広範に収集・検討し、朝貢使節同士の交流の実態や、朝鮮燕行使の海外情報収集の分析を通じて、北京が直接外交関係を持たない諸国の交流・情報収集の拠点となっていたことを明らかにした。清代の東アジア国際秩序において、朝貢体制は清朝を中心とする求心的な関係性だけではなく、朝貢国同士の関係性の構築の場も提供していたのである。